

## 蝶夢の俳壇登場をめぐる諸問題（上）

田中，道雄

<https://doi.org/10.15017/12256>

---

出版情報：語文研究. 21, pp.21-37, 1966-02-28. 九州大学国語国文学会  
バージョン：  
権利関係：

# 蝶夢の俳壇登場をめぐる諸問題（上）

田中道雄

五升庵蝶夢（享保一七一寛政七）が登場し、活動を展開するに至る宝暦・明和度、俳壇にはあたかも中興の気運が萌しつゝあった。これまで浄業の余暇に貞門系俳諧を樂しむにすぎなかつた僧蝶夢は、いつしかその気運に影響を受け、また影響を与えつつ俳壇主流に身を委ねる。俳僧蝶夢へと変貌を遂げたその初期の活動の実態を捉えて伝を記し、その特質を見出すことが本稿の意図するところである。さらに俳諧中興運動の側面をも窺見し得るなら、稿者にとって望外の喜とすべきであろう。

## 一 年代区分

本稿が、蝶夢の活動の初期として扱う期間を明和七年までとする。さらにそれをへり宝暦一〇年・へ宝暦一一年り明和七年の二期に分け、それぞれを第一期・第二期とする。その区分の指標となるべき事実を述べよう。

まず宝暦十年であるが、この年までに蝶夢は宋屋門から支麦系へ転じたはずで、宝暦十一年には、はじめて支麦系俳書に出句した。また明和七年は、その最初の大事業であった義仲寺芭

蕉堂修復達成の年として忘れられない。この二時点は、蝶夢の俳壇登場の階梯としてきわめて重要と思えるが、同時代人もまた、この両件をもって初期蝶夢の重要な体験と見做したようである。ここに興味ある資料を挙げよう。「東海道祖翁句集並古歌」と題する写本であるが、その義仲寺の項に次の一節が見える。

○近年宝暦十年の頃京都下岡崎五升庵蝶夢四方の俳人に触て此草室を創し室内に翁の門下三十六人の秀句をあつめて其門弟子の血脈を尊其輩の孫弟の胤をたつねて是に書しめ四方に配る

蝶夢が義仲寺に芭蕉堂再興の供養を営んだのは明和七年三月十五日であった。したがって、文脈上「此草室を創し」にかかる「近年宝暦十年の頃」は明らかに誤りである。しかし、かような年号と年次を通しての誤りは、書写上の誤記とするより編者の記憶の齟齬に基づくと認むべきであろう。すなわち「宝暦十年の頃」はたんなる年代のずれという性質の誤りではなく、その年頃を蝶夢の活動活潑化の始期とする別の記憶が存した故の誤用なのである。蝶夢等京俳人の動向に明るくと思える編者に

よつて、この二時点が蝶夢の重要な伝記的事実として記憶され、時の経過に従つて混同を招いたのではあるまいか。このように仮定するなら、この資料は右二件の時期区分指標としての妥当性をはからずも裏付けているわけである。

## 二 この期の略伝

はじめに初期の蝶夢の伝記的事実を略述しよう。五升庵二世瓦全の執筆と思える「師傳」（寛政九年刊『俳諧童子教』収）は、冒頭次のように述べる。

幻阿師ハ、京師ノ人也以テ享保十七年ヲ生ル幼ナク投ニ洛東法国寺ニ師トシ事フ其阿ハ遊行之徒ナリ鑑ミテ児ノ穎敏ナルヲ九歳ニシテ剃度スレトモ終ニ迦ル吉水之流ニ学成テ乃チ住ニ于中川阿弥陀寺ノ中帰白院ニ然レトモ常ニ不<sub>レ</sub>喜<sub>三</sub>徒ニ食<sub>二</sub>檀施ヲ於レテ是ニ明和四年三十六歳ニシテ附シ其ノ院ヲ法嗣某ニ而洛東岡崎村ニシテ縛フテ小菴ヲ静心念佛シテ居レリ焉師有<sub>二</sub>雅情一以テ故ヲ山人墨客ト締フ交リヲ淨業ノ餘暇常ニ為<sub>二</sub>ス方外之遊ヲ自ラハ玩ニ誹諧ヲ深ク慕ニ芭蕉翁之風致一

ここに大方は尽くされているが、未だ分明でない点も多い。

たとえば俗姓名や出自である。「師傳」には「京師人也」とあり、安永六年五月朔日白露宛書簡にも「野子素上の事申よし野子は京都産に而京をはなれず勿論越前敦賀は先祖の親族に御座候致九歳より出家申候」とあつて、出生地が京であること、敦賀に縁者がいたことは間違いない。しかし他にも小林文夫氏が明和九年正月二十五日素郷宛書簡を引用して「蝶夢の故郷は加賀であつたらし」と述べ、信憑性には乏しいが、また「五

升庵道統系譜」に近江木之本（湖北に位する北国街道の宿駅）の出身とする説があることも無視できない。父や一母なりける尼上<sup>(5)</sup>については何も手掛りを得ぬのが現状だからである。その縁故の深さは別として、北陸路に限つて関係づけられることも留意さるべきであらう。

享保十七年十一月一日誕生、元文五年九才で出家して時宗法寺に入り、其阿上人の剃髪を受けて木端<sup>(6)</sup>と称した。

延享元年（蝶夢十三才）法国寺の文庫に「枝葉集」（俳諧作法書、沾徳編、正徳五年刊）を見出してより俳諧に関心を寄せ、同年または翌延享二年（十四才）浄土宗阿弥陀寺の支院である帰白院に転じてからは、師僧般亮・法兄一松の影響でさらに興味を覚える。自ら「睡花堂蝶夢」と号したのもこの頃で、法国寺から携行した「枝葉集」の表紙にその俳名を書き付け、その後も所持した。

般亮は、「帰白院檀中靈名經木帳改」（以下「經木帳改」と略称）に、

十世 泰蓮社安譽<sup>諡</sup> 心頌和尚 延享二年十二月十一日

と見える心頌和尚と思われ、八世の音長法師ではあるまい。<sup>(1)</sup>なげなら、寛保四（延享元）年の「四時堂米史歳旦集」には般亮・一松とも出句するのに翌延享二年歳旦集には一松のみ出句し、かつまた、宝暦十一年の序ある「俳諧古選」附録には蝶夢・一松と連出しながら般亮の名を見ない。この事実は、仮に般亮を心頌和尚に当てるなら、延享元年後半に発病して二年末に没したと考へて解決がつくのである。音長法師はむしろ歌道に長じて

おり、「熊野詣での紀行」でも専ら歌のみを詠んでいるし、明和二年十二月十八日に没した際の蝶夢の追悼も和歌によっている（『蝶夢和尚文集』所収「音長法師追悼和歌跋」）。従ってこの人を俳諧に結びつける手掛りは見出せない。般亮は蝶夢の帰白院入寺当時の住職心碩和尚とすべきであるが、そうすればまた、十三才の時は法国寺にあったのであるから、転籍は前述の期間内に限定されるであろう。

師僧の死に遭遇した十四才の蝶夢を慰励しつつ導いた恩人が、退隠後も院内にあった音長法師であった。蝶夢は十世心碩和尚を襲った十一世住職で（『經木帳改』<sup>13</sup>）、住職就任の年まで音長法師が寺務を代行したものとされる。その就任の年を『五升庵上人年譜便覧』は宝暦六年（二十五才）とするが、既に十世没後十一年目である。右の事情が有るとするならば、蝶夢の就任が今すこし溯ることもあり得よう。宝暦四年六月、巴人十三回忌追善法要が同帰白院において営まれた。その記念集『<sup>14</sup>夜半半明の蓮』（宋屋編）に蝶夢は次の二句を寄せている。

追福

光陰も馴る、間はやし一夜酒

蝶夢

机墨庵主十三回の追善興行ハ予か法室に入て宴を求む諸好士群来りて窓外に満る

蝸牛の家へ維摩の客人数

全

この「予か法室」の語は一寺を住持する責任ある立場を示し、「蝸牛の家」はその故にこそ吐くを得た謙辞とすべきではあるまいか。法宴のためとは言え、多数の俳友を己が堂内に請ずることを得たのも、既に帰白院を支配したことを物語るものと言

えよう。傍証を得ぬ限り、「年譜便覧」の宝暦六年就任説は疑うべきである。

ともあれ、蝶夢は明和四年（三十六才）まで帰白院住職として在職した。その後下岡崎に移るのであるが、その結庵は退院の年と一致しない。明和四・五年中の序跋には例外なく「京極中川の法師蝶夢」等の署名が見え、六年には三月十二日興行の『己丑墨直し』序に「京極中川わたりの法師」、四月付の『俳諧十論発蒙』跋に「於東山岡崎の庵にて蝶夢書之」と記されている。そこで明和六年三月から四月に至る間を結庵の時とすべきであるが、大内初夫氏に異説がある。『続句集』に、

ふるとしては、蝶夢法師としころ住たまふ中川の御寺より此岡崎に隠居し、庵むすび給ふにこゝろたのしくて、

酔をもらふ隣もできて花の春 諸九

の句があり、「明和六年諸九尼歳旦帳」にも見えることを根拠に、明和五年の結庵とされるのである。この矛盾を解くためには、五年末に一応の移転を終りながら、五年末から六年三月にかけては未だ全生活を岡崎へ移すことを得ず、従来のように帰白院を用いることもあったと想像するしかない。五年十二月八日記の『はちた、き』序には「雪吹ちらす……夜人くこの中川の庵にまどるして……あるしの法師……などやこの雅興に一詠なくてはとそ、のかし聞ゆれば一座あつほの會となりぬ」と記すが、蝶夢自身のことらしい「あるしの法師」を慕って人々が集う夜が、序の日付からひどく溯るとは思えない。ひとまず岡崎へ移ったのは明和五年の歳暮とすべきであろう。明和四年法座を十二世松重和尚に譲ってからの一年余は、そのまま院内

の「半閑堂」で隠棲したものとされる。岡崎の庵が「五升庵」と命名されたのは明和七年正月であったが、その経緯については西山隆二氏の考証が備わるので記さない。

以上は、初期蝶夢の主要な伝記的事実の確認と年次限定を試みたものである。①法国寺入山②帰白院転籍③同院任職就任④同院退院⑤岡崎庵結庵と述べ来たが、①②③は俳諧活動とは結びつかず④⑤は後述するように不可分である。帰白院退院とそれに続く二三年こそ、俳諧活動が寺僧生活に代って主業となる転機であった。蝶夢の生涯に決定的な方向付けをなし得たこの時点までを初期とし、一劃して本稿に論ずる由縁である。

### 三 第一期の俳歴

初期蝶夢の俳歴をまず第一期から述べて行こう。十三の年、法国寺内において『枝葉集』を披見したのが端緒となり、帰白院に移って般亮・一松の俳話を聞いたことは前述した。しかし、この師や法兄に従って貞門末流の四時堂二世米史の俳席に列つたとの資料は未だ見当たらない。まだ若輩であったし、早くも延享四年（蝶夢一六才）十二月二七日、米史は四十四才で没したからである（『誹諧家譜』）。蝶夢の最初の出句は、管見では先の『十夜半明の蓮』（宝暦四年六月奥）であるが、机墨庵宋屋（元禄元年—明和三年、原松門、のち巴人門）に近づいたのは、宝暦五年刊『杖の土』（宋屋編）によればさらに溯るかも知れない。同書は宋屋の東北行脚並びに耳順の賀集で、旅行は延享二年九月十六日京出発、仙台で越年して翌三年三月松島に遊び十一月初め江戸着、同月末に帰洛したらしく、また年賀は

正當なら寛延元（延享五）年に開宴されるはずである。従って、いずれの場合をとつても刊行は著しく時期を逸したことになる。ところで同書洛の部に、

奥羽の遊旅も二とせあまりありてふた、ひ花落の草扉に座す  
おろかさは旅とおもはず宿の春宮崎屋 宋屋

を立句とし、松江以下がこれを次いだ百韻が出ている。その中の八七句目に蝶夢の名も見えて同座が証されるのであるから、脇以下の連吟をも帰京早々の賀詠とするなら同座は延享四年、蝶夢十六才の春であった。次いで、

師翁の齒を寿く  
また本にこまかへりたり翁草 蝶夢  
鳥の心も解初る況 宋屋

二の替り曾我傾城に定りて 嘯山  
に始まる六吟歌仙（他に李卿・都夕・蝶車）があり、「師翁」と呼ぶこと、発句を詠むことが注意される。これは寛延元年春のことであろうか。順当にこの年開かれておれば蝶夢は十七才、発句を詠み、師宋屋（耳順）と先輩嘯山（三十一才）にこれを次がせるにはやや早すぎる年令ではあるまいか。とするとこの賀会の年は動くかもしれない。不安は帰洛祝賀の百韻にも及び、正當年開筵に非ざるかとの疑いを残すのである。また洛の部最末部には、

紀行年賀相和して一集成るを祝す  
月雪に果報いみじき爺哉 嘯山  
筆まめ足まめ六十一帰 蝶夢  
に始まる両吟二十四節と嘯山の漢文跋が付置されており、嘯山

との近接および嘯山に協力して本書編纂に多少は参画したらしい様子も窺われるのであるが、この歌仙興行もまた一つであるか不明である。『杖の土』成立の年と言われる宝暦二年(二十一才)の可能性を認め得るとしても、跋年の宝暦五年とする説も否定できないからである。結局、三巻を通じてその興行年推定は甚だ心許ないものとなった。稿者は先に宝暦四年以前入門の可能性を説いたが、年次確認可能の上限はなお「夜半亭明の蓮」の法筵なのであって、蝶夢の宋屋門入門の時期は、不本意ながら宝暦四年六月以前としか言えないのである。後述するように蝶夢が宋屋に特に親炙したとは認められないが、それはまた交渉期間がさほど長くはないことを物語るものかもしれない。宋屋門入門の時期が格別早かったとは思われないのである。ともあれ宋屋門としての俳優は宝暦十年頃までは続く。以下、出句を年譜風に示そう。

- 1、宝暦四年六月頃「夜半亭明の蓮」(宋屋編)刊。掃白院における追善興行に同座、統餘韻に同座、発句二句入集。
- 2、宝暦五年二月頃「うた、ね」(一炊庵紹簾編)刊。賀歌仙に同座、宋屋門連衆とともに一句入集。同書は編者の八十寿賀集。編者は沾徳門、大坂住。
- 3、同年「杖の土」(宋屋編)刊。<sup>19)</sup>竿秋の序あり。本文の部未見。(前述)
- 4、同年十二月頃「真空言」(夕静編、風状後見か)刊。一句入集。同書は画讀集で宋屋・風状等の跋ありと言ふ。<sup>20)</sup>編者は宋屋門また風状門、諷州丸亀の人でしばしば在京した。
- 5、宝暦六年一月「歳旦」(一草舎晚鈴編)刊。「同(京机墨庵連)と肩書して」一句入集。編者は大坂住、俳系未詳であるが宋屋門に極めて親しい。

- 6、同年二月頃「續霜徹誹諧集」(丈石齋宗順編)刊。付句四句入集。同書は高点付句集。編者は知石門、京住、千載堂とも号した。
- 7、同年六月「露の一葉」(吉沢鶏山序)刊。一句入集。本書は新井弉葉追善集。鶏山は涼袋門、信濃の人と言ふ。<sup>24)</sup>
- 8、同年夏「夜半亭二十五回忌集」(晚鈴等編)刊。宋屋門連衆として一句入集。「同(京)墨雲亭 蝶夢」の号を用いる。上巻未見。
- 9、同年十一月頃「一葉塚」(乙貫、虎州編)刊。「宋屋連」として一句入集。同書は風雪五十回忌集。編者は淡路の人で風雪の甥と言ふ。大坂住か。
- 10、宝暦七年十月頃「俳諧誹諧鳥」(三居庵飛良編)刊。一句入集。編者は乙由門、京住。練石の跋あり。<sup>25)</sup>
- 11、同年「高机すみ」(宋屋編)成。付句四句入集。同書は編者の古稀年賀の高点付句集。前編未見。
- 12、宝暦八年一月「宝暦八年除元集」(風雲齋風状編)刊。一句入集。編者は羅人門、京住。
- 13、同年六月頃「戴恩謝」(宋屋編)刊。同書は巴人十七回忌集で、巴人遺句を宋屋以下が次いだ歌仙に同座、第五句を詠む。一句入集。
- 14、宝暦十年九月頃「裸嘶」(春要齋五始編)刊。一句入集。編者は羅人門、京住、この頃は太坂住か。紹簾の序・跋あり。
- 15、宝暦十一年六月「俳諧古選」附録(律亭嘯山編)成。一句入集。同書の性質からして当年作とは限らない。編者は宋屋門、京住。

以上が管見にはいった宝暦十年までの出句のすべてである。精査すればさらに資料を加え得ると思うが、右十五項に限っても大凡の交流圏は把握できるであろう。まず地域別に見るとそ

のほとんどは京俳書（136101112131415）で、それに大坂俳書（258）を加えたものである。地方俳書はわずかに4（讃岐）7（信濃）9（淡路）の三点に過ぎず、4は京へ9は大坂へ含めることも許されよう。純粹な地方俳書は7のみとなり、俳交が二都俳壇に限られたことを示している。交渉俳系はどうであろうか。宋屋編書（131113）同門人編書（15）は当然として、竿秋（3序）五始（14）風状（412）等淡々系俳人の編書が目を引き、その余の俳書も中にこの三者の名を見出さぬものは稀である。宋屋門と淡々系とが其角系同志として同一俳圈を形成し、その内で極めて密に接したことが理解される。宝曆七年三月大坂の大江丸が始めて蝶夢のもとに來訪したが、『はいかい袋』、この頃大江丸は淡々・良能の門に遊んでおり、

ここにも京坂を同一域内とし、宋屋門と淡々系とが交流し合う姿を見出すことができる。大坂俳書への出句は常に宋屋連衆の一員としての形をとるから当時の蝶夢が直接往來したことは少いと思えるが、紹簾（214序跋）が沾徳門であることは、かつて蝶夢が『枝葉集』を愛読したことを想起させて興味深い。なお注意すべきことは、2と13の歌仙において蝶夢と巴人門凡圭が、13においては同門雁宕と蕪村も同座していることである。以上はすべて其角系集団として統括できるが、次いで丈石（6）練石（10跋）等の貞門をも加えるなら、蝶夢が生活した俳諧社会は一応俯瞰し得たこととなる。

右の俳圈に収め得ぬものとして710が残った。7は未見であるが北田氏によると編者は涼袋門であり、希因を經れば10同様乙由に辿りつく。ここに注目すべき現象は京俳壇と地方蕉門俳

壇ことに乙由系との接触である。嵐雪五十回忌集の9が地方蕉門の句を集めるのは当然ながら、12には乙由門飛良が出句し、14では多数の伊勢俳人の名を見出すことができる。都市系の俳書に地方からの出句を見るだけではない。3では宋屋の東北行脚途上において、

参宮の折麦林亭へ尋入

花も穂も今濱荻の盛り人

行脚 宋屋

荒田に馴染かねる落雁

杜菱

の贈答があつたし、14でも五始の伊勢行が認められ、10の乙由系俳書には宋屋門や淡々系俳人が出句するのみならず貞門の練石が跋を寄せている。4の夕静もかつては伊勢派に属した人であつた。かかる交流の動向が、わずかながら蝶夢周辺の老宗匠達にあつたことを注意しておきたい。

ここで蝶夢の宋屋門入門の契機を考えたいのであるが何ら手掛りを得ない。宋屋と淡々系及び貞門俳人との接近は既に述べた。蝶夢に俳話を語つた般亮・一松の師、貞門の米史も淡々に近づいたようである。蝶夢が米史に接したかは明らかでないが、最初の俳席がその系統に近いものであろうことは想像できる。右に見た貞門―淡々系―宋屋門の三者結合を背景に考えれば、ひとたび京の俳壇に列なつた蝶夢にとり、宋屋門入門の機会は極めて自然に到來したものと思われる。後に蝶夢が跋を寄せる『（奥羽紀行）』（明和二年刊）の著者西角庵一方入道行雲は貞門の人であつて（『誹諧家譜』『同拾遺集』）、蝶夢と貞門との関係の一端を示している。

ともあれ蝶夢は宋屋門の人となつたが、果していかほどの期

間、いかほどの熱心を以つてそこに属したか。宝暦八年の「戴  
恩謝」以降宋屋門にとどまった証拠はない。後年の蝶夢は宋屋  
門時代の自分について多くを語っていないし、一たびは宋屋を  
「師翁」（「杖の土」と仰ぎながら）一人の門弟一人の師な  
き事は海内しれることにて候」（天明三年四月十九日里秋宛書  
簡）と立言するのも不思議である。明和三年に宋屋は没したが、  
「香世界」（四年刊）所載の追悼百韻に連座もせず、わずかに  
句を寄せるに過ぎなかつた。

散きはもさすが老木の桜かな

であるが、ここに切ない哀傷や追慕の情を窺うことはできない。  
蝶夢が宋屋門の体験をあまり感謝しない様子は『草根発句集』  
の自序（安永三年）にも見出される。

……京極中川の院に住けるに師の僧を般亮といひ法兄に一松といふ人  
の有けるか常に其ころを語けるを聞て、みつから蝶夢と名を付ぬし  
かりてよりのち都下のはいかに遊ひて空腹高心の人と成しにさるへ  
き因縁の時いたりてや越の敦賀の浦にて芭蕉翁の正風体を頓悟してそ  
れより……

般亮・一松の名は出るのに宋屋の名は出ない。それどころか、  
「都下のはいかに遊ひて空腹高心の人と成し」期間こそこの  
章が扱う第一期に相当する。この時代を想起するたびに蝶夢の  
胸には苦い悔恨の思いが走つたのであろうか。いかにも自己自  
身の姿を否定したげな言い草を聞けば、宋屋門時代の蝶夢がそ  
の俳諧に何らかの価値を見出し、専心句作に励んだと見るのは  
早計のようである。むしろこの師弟関係は社交的色彩が濃いも  
のと見るが正しいであろう。とりわけ長く緊密なものではな

つたのである。蝶夢は次第に宋屋門から遠ざかつた。そして数  
年後（宝暦十三年）には最初の編書「松しま道の記」を刊行す  
るに至るが、その中に蝶夢は、丈石・風状・一方等に交えて宋  
屋と旧門友宋専・嘯山・武然等の句をも収めた。宋屋門との離  
隔が不自然に進められたのではないことを物語るし、またそれ  
が許される程度の結合でしかなかつたことをも想像させるので  
ある。わずかに見出せる「鳳声亭」の号を用いた頃（38）宋  
屋連衆に伍して出句した頃（2589）こそ宋屋に最も近づい  
た期間と考えられよう。

#### 四 第二期の俳歴

##### (1) 宝暦十三年まで

宋屋門から遠ざかる契機は、或日偶然に訪れた。後年の蝶夢  
は次のように記している。

……蕉門に入たるは俳諧に恥をかきてより自然と蕉翁学ひ候よし御申  
くたさるへく候、其席は越前敦賀白崎庄次郎琴路亭其席中の人、また三  
四人存命にて候かくれなき事にて候……（天明元年三月廿日白露宛書簡）  
……敦賀白崎氏に而はしめて蕉門に入り候事はは付句の法をしらす點  
取之衆中故不付候故に俳諧に道のある事を自悟せしにて何も一句の上  
にて発明なと申尤なる事にてはあらず候其連中敦賀に未三四輩致存命  
候……（天明元年十一月廿三日白露宛書簡）

この二資料に前出の『草根発句集』序をも参照すれば、(一)、越  
前敦賀琴路亭の俳席で恥をかけたこと、(二)、その理由は従来点  
取俳諧になじんでいたため、付句の法を知らなかつたからであ  
ること、(三)、この事件を端緒として俳諧に道あることを悟り蕉



門に近づいたことの三点に要約できる。以上いずれも重要であるが、俳壇史的考察を続ける今はひとまず(二)をおき、(一)(三)を考  
えたい。その前に次の資料をも加えておこう。

……今般浪花二柳庵東都江被致下向候付添書之儀相頼被申候此人は加  
賀(書入あれど不明)希因門人にて従来宿老にて候野子杯も蕉門に入  
り申こと此人之勸にて候……(安永六年五月朔日白露露書簡)

……浪花二柳庵は加賀山中之火宅僧にて候希因門人にて候(宿カ)老  
にて候野庵蕉門之交候は此人にはしまり候……(寛政六(五カ)年正  
月廿八日白露露書簡)

ここでは、(四)、蝶夢の蕉門移行は二柳の勧めにより、交渉の端  
を此人に得たとすることが注意されるであろう。

錦溪舎琴路(享保元年—寛政二年)は支考系東怒門で二柳に  
も学び、「おくのほそ道」原本の旧蔵者として知られている。

三四坊二柳(享保八年—享和三年)は加賀山中之出、桃妖・乙  
由・希因に学んで不二庵とも号した。行脚を好み、寛延末には  
京に出、宝曆初には凡圭を通じてかなり多くの京俳人と交流し  
たであろうと言われる。さて、右の(一)(三)と(四)の間に矛盾は生じ  
ないであろうか。(一)(三)は、琴路亭で自ら「芭蕉翁の正風体を頓  
悟し」(『草根発句集』序)たと言ひ、(四)は、二柳の勧めで蕉  
風に交わったと言ひるのである。この二体験を矛盾なく受け入れ  
るためには、以下の諸条件の成立が望ましいであろう。すなわ  
ち、(イ)、二体験の間に時間的な連続があること、(ロ)、二体験の  
間に脈絡がつくこと、さらに望み得るなら、(ハ)、二体験が共通  
の場を持つことである。ところでこの二体験は蝶夢自身の言葉  
で語られているのだから、我々はこの三条件を充足させながら  
蝶夢伝を構成せねばならぬことになるのである。

条件(イ)から始めよう。琴路亭における蕉風頓悟を北田氏は宝  
曆六年とされるが、その証を見出し得なかった。他方、二柳と  
の交渉を示す最初のものは、管見では宝曆十一年三月刊「二柳編」  
「墨直し」である。その自序に「予ことし其會(東山双林寺の墨  
直會)上につらならんと東湖の寓居をはなれて西京の二三子を  
窺ふにあるは芳野の華に裳をか、けあるは須磨の瀧に述を□ふ  
されはこの日のむなしく過なんをおそれてみつから」主催した  
と言ふ。そして集中には、

□(不明)の房や我は須磨から墨直し 蝶夢

の一句を掲げるから、「西京の二三子」の一人が蝶夢を指すこ  
とは疑いない。桜の絵を配し僅か二句しか収めぬ七丁目表を蝶  
夢句に当てることから見ても、その扱いは決して軽いとは思え  
ないし、また序文から察すれば二人の交遊はすでに幾何かの月  
日を経るようである。ここでこれまでの二柳の動向を振り返っ  
てみよう。宝曆初年、既に京俳壇に知己を得たことは述べた。  
九年八月上旬琴路亭において「細道伝来記」をものし、十二月  
兵庫・須磨、明石と旅して但馬の生野で越年、一年間滞在の後、  
翌十年十月後援して出刊せしめた文狸編「落葉籠」に序して  
生野を出発、近江八幡で越年して十一年正月には「除元帖」  
を刊行した。この間に二柳が京滞在をなし得た期間には、a、  
九年七月以前、b、九年八月—十二月、c、十年十月—年末  
の三つの場合が考えられる。二柳との交渉の始期はそのいず  
れかに含まれるはずであるが、そのいずれにも否とする根拠を  
見出せなかった。従つてこの場合も、両者接近は宝曆十年末以  
前とする中広い年次限定で満足する他はないのである。ところ

でこの条件(イ)を満足させるためには琴路亭頓悟もまた宝暦十年末以前でなければならず、しかもこれは遙かに溯るとは思えない。頓悟時の上限を『戴恩謝』出句直後あたりとするなら、二柳との交渉始期はおよそ宝暦八・九・十年の間に在って、その後半ほど蓋然性が高いことになる。

次に条件(ロ)について考える。この条件もまた充分に成り立ち得る可能性を持った。なぜなら、蝶夢—琴路間、蝶夢—二柳間のみならず二柳—琴路間の交渉もまた既に見たように存立するからである。ところで三角形の三辺にも似たこれらの交渉が、それぞれ独自に発生したと見るのは妥当ではあるまい。条件(ロ)成立のためには、いずれかがいずれかを派生した、つまり三者の—が紹介して残る二者間の交渉を開き、そこに三巴型の交流が生じたと見るのがより事実に近いであろう。それならばその紹介者を誰とするのが至当であろうか。「蕉門之交」を紹介されるはずの蝶夢が、支麦系同志の二柳と琴路を紹介したというのはおかしいから、琴路または二柳とすべきである。次いでその二を一に絞るには慎重を要するが、やはり琴路と考えたい。(一)と(二)の間に脈絡をつけるなら、(一)が先に生じ、それを端緒として(二)が生じたとすべきだろうからである。かねて二柳と交った蝶夢が、二柳の勧めで琴路亭出席のため京から出かけた<sup>39</sup>はまたまた敦賀に在った折に二柳の勧めもあって琴路亭に赴き、ここではからずも頓悟してその後次第に蕉門への俳交が開かれた<sup>40</sup>と考えるより、<sup>39</sup>たまたま敦賀に在った蝶夢は、縁あって、琴路亭の俳席に列なつてはからずも蕉風を自悟した。そこで琴路が当時指導を受けていた二柳を紹介してくれ、二柳の勧めも

あつて次第に蕉門へ接近した<sup>40</sup>と考える方が自然ではあるまいか。先の天明元年の二書簡と『草根発句集』序における頓悟の偶発性の強調は、それ以前に蕉門への関心が薄かったことを意味するからである。もつとも蝶夢が琴路の紹介なしに二柳へ近づいたと考える余地が無いわけではない。例えば前章にもその名が見えた几圭を介しての面識である<sup>39</sup>。しかし仮に在り得たとしても、琴路亭頓悟以前にその交渉が深かったとは思えない。やはり琴路の推挽を得て後、蝶夢と二柳の本格的な交渉が始まるとすべきであろう。

条件(イ)についてはどうであろうか。蝶夢は京住で二柳もまたしばしば滞京したこと、また両者ともそれぞれ異なつた事情ながら敦賀に関係を持ったこと、以上二点を考えればこれも成立し得る問題である。蝶夢が「敦賀は先祖の親族」と述べたことは既に書いた。この血縁を頼つてしばしば敦賀に出かけ、その地の俳席に出たとは充分考えられる。この点については北田氏の御説(前掲書二八ページ)に従いたい。蝶夢と敦賀俳壇との交渉の深さは、宝暦十三年の東北旅行に敦賀俳人蕉露を伴い、その記念集『松しま道の記』跋をその父蕉雨に書かせたことからも推測できる。蕉雨(—安永七年)は野坡門また希因門<sup>40</sup>、琴路とともに敦賀の有力俳人であつた。二柳の方はいかがであろうか。加賀俳人が上京の要路に当たる敦賀に俳交を結ぶのは至極当然で、二柳と敦賀俳壇との交渉も早く蝶夢と同俳壇との交渉以前に存したと思われる。宝暦九年二柳が琴路のために筆をとつた『佃道伝来記』を読んでも、これが琴路との初対面のようにには見受けられないし、「今や路子か生質を思へは、誹諧に累

年の蛩雪をか、けて、心上つねに信を忘れざるより、」と書くその一節を見ればむしろ交渉は久しいようである。後述する既白と琴路、麦水と琵琶舟の交渉を見ても、加賀と京とを結ぶ橋梁として敦賀俳壇が果たした役割はかなり重要なものと推定できる。この南越の地に係累を持ったことが蝶夢の俳歴を一変させ、その生涯にも別の行路を選ばせた。琴路亭訪問は偶然であるが、その背景には偶然ならざる中興俳諧史の胎動があったことを我々は見逃してはなるまい。

琴路と二柳を含む圏内から蝶夢の蕉門移行が展開して行く経緯は以上の通りであったが、その後の琴路との交渉を示す具体的な資料はあまり見当たらない。他方、二柳との交渉は次のように進んで行った。宝曆十一年、三月の『墨直し』に引続いて十月は『白鳥集』へと、蝶夢は支麦系俳書への投句を一度続けた。この年蝶夢は而立に達したが、この蕉門移行の明白な事実を以って、蝶夢の俳歴が第二段階へ飛躍したものと認めてよいであろう。右の二書のうち前者は二柳編、後者は二柳援助に成るから、二柳の誘引によるものであることは間違いない。この年の『墨直し』については先に述べた。『白鳥集』は琴路が同年芭蕉忌に編んだ鐘塚建立記念集であり、蝶夢・琴路・二柳の名を『墨直し』に続いて見るのは勿論ながら、やがて蝶夢が交渉を持つ支麦系の多数の名を見出すことは一層心強い。二柳は同年も近江八幡で越年して翌十二年正月『其しらへ』を刊行、蝶夢も一句を寄せており、四月十二日には前年の因によるものか再び墨直会を主催して『墨直し』を刊行した。その二柳発句の歌仙には蝶夢も同座するが、未だ表六句に位置してはいない。北

田氏が紹介された部分（前掲書四八ページ）だけでは蝶夢の座順は不明であるが、書肆「橋治」の前に出ることが注意を引く。二柳はその後伏見へ居を移し、同年冬は伏見を立てて讃岐丸龜で越年、明和末まで讃阿に滞在した。

蝶夢は「野庵蕉門之交候は此人にはしまり」（前出書簡）と言った。その蕉門の面々が誰々であるかを正しく推測するのは困難であるが、想像できる範囲を大別すれば、在京俳人と加賀俳人の二群になるかと思う。蝶夢に大きく影響した後者から始めよう。二柳に次いで蝶夢に近づき、感化を与えたのは無外庵既白（一明和八年または九年）である。この希因門の漂泊俳人には、宝曆九年春加賀を立ち、象潟・松島を巡って閏七月二十日頃江戸に入って蓼太を訪ねた『菝一重』の旅、翌十年春加賀出発、龍田・吉野を経て五月始め熊野本宮に至る『やふれ笠』の旅があった。前の旅ではその必要もなかったが、後の旅では明らかに滞京したものの、二柳が生野に在ったためか蝶夢との交渉は生じなかった。名録に在京の伊勢派飛良、美濃派山只、また丈石・風状等の名が目につくのみである。翌十一年は七月出立、天の橋立・須磨、明石・高砂と吟遊し、巖島・讃岐を経て初冬京へ帰る『ゆふ日鳥』の旅があったが、この半年の間に蝶夢と既白の親密化は急速に進んだようである。近江八幡に在った二柳の紹介によるものであろうが、二柳の句は見えていない。両者接近の事実は、往途に会して、

既白法師と丹州の風景を語る子か其時の口（句カ）

橋立や波押分て松の月

墨

蝶夢

の詠、さらに帰洛を迎えては、

既白鳥風の二客に對して

とまれた、聞せむ鴨の川千鳥

皇都

蝶夢

の吟があり、蝶夢が旅行に何らかの便を与えたらしく見えること、五句という多数を出句すること、しかもその一は巻頭秋の部の軸、他の一は全巻の軸である風状句の前に位置することからも窺える。またその全巻軸の風状句詞書には「加州の既白法師に尋られて」とあつて既白の風状訪問が証せられ、讚州丸龜で夕静亭に宿つたのもその紹介によると想像されるが、先に述べた地方蕉門俳人と京俳壇との交流の一例証として甚だ興味深い。また越前兵庫で柳居門梨一、敦賀で琴路、播州姫路で惟然門寒瓜、芸州広島で野坡門風律を訪ねたのも注意される。

次に蝶夢の前に現れた加賀俳人は四楽庵（のち樗庵）麦水（享保三年—天明三年）であつたろう。宝暦年間最初の麦水上洛を証するものは宝暦十一年『墨直し』である。二柳主催のこの席上、二柳麦水は十年振りの対面をした。同書にはその感激の交吟を掲げている。

一別十とせはかりなる四楽主人にこの東山にめぐりあひて

暫くはもの、いはれぬさくら哉

三四坊

見しりは残る髭の雪にも

麦水

☆ ☆ ☆

花の日に白根のむかしかり哉

三四坊

雲に入らねはめぐりあふ鳥

麦水

この後二柳の仮寓を近江八幡に訪ねたらしいことは、二柳の「哭樗庵先醒辞」（『阿羅屋』収）の記事「一たび金城の群を離散せしより、更に相逢ふことの稀なりしが、君はことにいかな

る宿世の元や有けん、別後猶ほどもあらで洛にめぐりあへるより、さ、波やあは海のほとりに交を修し」<sup>(47)</sup>によつても明らかである。この折に蝶夢が麦水と面識しなかつたのは、前述通り須磨に旅したからであつた。麦水は翌十二年にも上京し、伏見に二柳を訪ねたやうで、その証は残らぬが蝶夢と既に出会つたかもしれない。

加賀俳人との交渉の次には、在京蕉門俳人との交渉を把握すべきであろう。その確実な資料は宝暦十三年に至つて多出する。前年及び前々年には二柳の紹介によつて京蕉門と交渉を持つて次第にその地歩を固めつつあつたが、出句の機会は未だ多くはなかつた。それがこの年には、芭蕉七十回忌に当たる故もあつて急速に活潑化した俳壇の動きの中で、蝶夢の活動また顕著になり京蕉門俳壇の要衝に着く。また記念すべきは三十二才のこの年に始めて自編著書を刊行し、他にも跋文を与えたことである。多彩なこの年の活動を見る前に、前章に倣つて宝暦末年の俳歴を整理しよう。

（○印は蝶夢編著書、□印は序跋を寄せるなどして刊行を援助するもの。）

- 1、宝暦十一年三月「墨直し」（二柳編、自序、麦水跋）刊。一句入集。十二日の会式には須磨旅行中のため欠席。
- 2、同年十月頃「白鳥集」（琴路編、自序、蓋江跋、二柳後援）刊。一句入集。
- 3、同年十月頃「ゆふ日鳥」（既白編、鳥風序、幽更序）刊。五句入集。
- 4、宝暦十二年一月「壬午其しらへ」（二柳編、自序）刊。一句入集。
- 5、同年四月十二日、双林寺の墨直会に出席、歌仙に同座。（北田氏前掲

書によつたが、二柳編同月刊「墨直し」所引と思われる。

6、同年八月、熊野旅行ありと言ふ。(「年譜使覧」)文下・鯉風・音長法師同行で八月二二日出発、九月九日過ぎ帰京して「熊野詣での紀行」成る。この頃、野城門文下との交渉始期か。

⑦、宝曆十三年三月中旬から五月七日にかけて、蕉露同行の東北旅行があった。自編の記念集「松しま道の記」(蕉雨跋)は同年刊であろう。

8、同年五月「その行脚」(諸九尼編、杏雨序、風律跋)成。一句入集。同書は浮風小祥忌追善集。

9、同年七月頃「誦わせのみち」(知十編、麦水序、麦水後援)刊。一句入集。知十は越中滑川住、師系未詳。同書は芭蕉七十回忌に因む有磯塚建立記念集。

10、同年九月「古今俳諧明題集」(涼箬編、藤原伯洲序、自序)刊。一句入集。涼箬とは東北旅行中信州小諸で同宿し、互いに語らず別れたと言ふ。(49)

⑪、同年十月十二日、膳所義仲寺において芭蕉七十回忌法要を主催し、「蕉書七十回忌 粟津吟」を刊行。(50)

12、同年十月頃「文塚集」(貫古編、南面山小隱土序、既白跋)刊。蝶夢は「花落社中」の半歌仙に同座して発句を詠み、他に一句を投じた。貫古は惟然門、播州人、京住で医を業とし(「新撰俳諧年表」)、鞍馬に毎日庵を結んだ。既白の跋は前々年の播州寒瓜訪問に由縁あるであろう。13、同年十月頃「花のふること」(關更編、文素序、既白賛助か)刊。一句入集。同書もまた七十回忌記念集で、芭蕉関係原資料の蒐集紹介を意図している。

14、同年冬「鶉たち」(麦水編)刊。(51)蝶夢は一句入集するのみならず跋をも寄せた。「桑のものかひねはわか道の事なるを此居士のふる舞も

また籠くろます置あた、かならざるものから前身野僧かといふかるもむへ也ことしはみやこの雪に水はなをたれこん春は東の花に涎をなかさん事のうらやましと橘やか店にして蝶夢子らく書す」

15、同年冬、一炊庵紹籙三回忌に悼吟を送ると言ふ(高木氏「蝶夢と落柿舎」一二二ページ)。忌日は、十月十四日(「新撰俳諧年表」)。

16、宝曆十一年四月二七日雲裡房没。その追善集「烏帽子塚」(文素、可風編、山只序、梨一序、可風序、山外跋)には蝶夢発句詠の追善半歌仙、発句一句を入集するが、同書は初七日・小祥忌・大祥忌と長期にわたる詠句を取め、しかも明和二年の刊行であるため蝶夢作句の年次推定は困難である。

通覧すれば宝曆十三年の活動が量的に拡大した様は自明であるが、内容にもまた興味深いものがある。その第一は、蝶夢が、京蕉門俳壇中に確固たる地位を獲得している事実であろう。7の名録には、京師として丈石・富鈴房・風状・一方・宋専・嘯山・武然・麗白・桃鳩・富水・窓鳥・太祇・召波・蕪村、そして一行分の空白を距てて、山只・松雀・江棧・諸九・文下・琴之・もと・安里・泥夫・雀之・秀草・疎文・竹芽・啞仏・子鳳。二柳庵の名が得られる。中央のブランクは何を区切るものであろうか。宝曆十一年以後、蝶夢の周囲に共在するのは後半のメンバーである。蝶夢主催11の法要に参じたのもそうであったし、蝶夢の編書に限らず12でも16でも蝶夢はこのメンバーが集う中で主席を占め、発句を詠むのが常であった。山只は支考門、越前人(「新撰俳諧年表」)で京蕉門の老匠、江棧・諸九・文下・琴之は野城門である。安里以下子鳳に至る人々については子鳳

しか俳系を確認できない。子鳳は麦里門と言われ(同上)、さらに麦里は支考系楚石坊門と言われる(同上)が、当時はかなり鳥酔門にも親しく、乙由系かとも思われる。いずれにせよ中央ブランド以下の人々が地方蕉門系統の人々であったことは間違いない。ブランドの右翼は貞門・淡々系・宋屋門等の京俳壇の人々であった。数年前そこに属した蝶夢は、今、明らかに左辺に身を移しているのである。その中でも秀草以下の人々こそ蝶夢至近の連衆であったと思われる。この連衆は東北から帰洛した蝶夢を中川の庵に訪ね、土産話に耳傾けながら歌仙一卷を興行して7の巻末に掲げている。それでは蝶夢は誰の紹介で彼等を識つたのであろうか。言うまでもなく二柳であることは、これまでの二柳関係俳書に子鳳・秀草等の名が累出することによつて証される。京における「蕉門之交」は、この二柳に近い人々との間にまず結ばれた。宝暦十二年、二柳は西去に際してその後事を託すに危惧する必要はなかった。社会的地位に加えて手腕と人格とを備えた蝶夢は、おのずとそのグループの指導的役割を果たすに至つたであらう。蝶夢は二柳を後継した。7の名録で、このグループに並んで巻軸に位置する「二柳庵」の名は、以上の事実を雄弁に物語るようであり、最初の刊行書の巻軸に蕉門の先達の名を据えて記念した、蝶夢の心にくい業と言わねばなるまい。

しかし蝶夢の東北旅行に寄与した者は誰よりも既白だつたと思われる。既白は同年三月末京を出て須磨・明石に向かったが(『俳ちりの話』序)、それは蝶夢が松島を目指して離京した旬日後であつた。とすれば両者は充分京で会ひ得たはずであり、

後述のように既白は蝶夢の庵室に宿ることもあつたから、旅行の行程が当然話題にされたであらう。古くその体験を持つ宋屋や蕪村の助けもあり得たろうが、四年前にその旅行を試みたばかりの既白こそ、当面恰好の協力者であつたに違いない。三月末に京を立ち但州生野の寒秀を訪ねた既白の「ちりの話」の旅はごく短期間で終つたと思われ、八月下旬「つきあかり」(青野・馬來編、蘭更点、梨一跋)に序を寄せた時はおそらく京にいたであらう。十月十二日は蝶夢と義仲寺に参詣して11の百韻に同座したが、その冬の内に帰北したことは12の跋と13の巻軸句で確かめられる。14によれば、麦水もまたこの秋上洛し、春へかけて湖東と京の間に滞在して蝶夢にも接した。麦水が安永元年に口授した「山中夜話」で、「予八九年以前、京より帰る比、江州長浜にやどり、琵琶といふ人と語る。」と述べるのは、蓋しこの時のことであらう。既白・麦水の行動がしばしば蝶夢のそれと相接することは以上の通りで、折しも蕉風復帰を目指して鋭意探求中の彼等から蝶夢は多くを学んだものと思われる。これが宝暦十三年の意義の第二である。

ところで蝶夢の俳交の拡大は京や加賀の俳人に止まつたのではない。7の東北旅行の途次に通過の諸国で多くの知遇を得て一二五句を贈られ、記念集に都合二四五句をも収め得たことは、蝶夢の活動が全国的規模で展開するに至る階梯として画期的な意義を持つものであつた。これが第三である。

第四は、11に見た義仲寺の芭蕉追善行事の主催、及びその記念集の刊行である。蝶夢の義仲寺崇仰の真摯さはよく知られ、またこれが蝶夢の蕉風復帰活動に特異な色彩を加えるのである

から極めて重要であるが、次の資料に明らかかなようにこの年を以て始まるのである。

……野納も人なみくゝに謝徳の心ありて七十回忌のころ此會に列りてよりこのかた……思ふにこの二十余年かほと月毎に當寺にまうて来りて祖廟に洒掃の礼奠をこたらて……(天明三年刊「しくれ會」序)

記念集はこの後例年刊行されるに至った「しくれ會」の嚆矢をなすものであり、わずかに七丁の小冊子とは言え、蝶夢の出版活動上に占める意義は大きい。

第五は、書肆橘屋治兵衛との接近である。14の跋に「橘やか店にして蝶夢子らく書す」と記すが、既にこの年同店へ出入し始める事実が驚かされる。蝶夢に協力した同店の役割は無視できないものがあり、俳諧史の側面を示して興味深い問題でもある。第四とともに後述しよう。(未完)

註

1、やや時代は下るが、嘉永六年刊「俳林小伝」(中村光久編)では、その号や住居を掲出した後、俳歴としては「粟津ノ蕉堂再建セシ人也」とのみ記している。

2、中本一冊、元治元年後々庵塚原驢山写。中西啓氏蔵。同氏が「太白」四〇年二月号、三・四月号に翻刻紹介。中西氏は編者を島秋里湘夕に擬しておられ、内容は「東海道名所図会」に甚だ近い。

3、「蝶夢覚書」(「連歌俳諧研究」第十一号)七七ページ。

4、同書に「上人ハ近江木本駅ノ出身ナリト坂口村ノ老農布施正心居士ノ話ナリ参考ノ為ニ記シ置ク」とある。同書はまた蝶夢を「祖翁親弟凡兆流胤」とするが、この説は北田紫水氏によって否定された。(「俳僧蝶

夢」一ページ以下参照)しかし木の本出自説までが充分に否定されたとは言えない。

「五升庵道統系譜」(明治三四年六月十二日奥、以下「道統系譜」と略称)は、「五升庵上人年譜便覧」(明治三十三年七月二日奥、以下「年譜便覧」と略称)とともにそれぞれ大本一冊、古葉園三世錫馬編の稿本である。北田氏旧蔵、明治大学図書館に現蔵する。臆断も多いが、蝶夢伝研究の嚆矢として貴重である。

5、わずかに「熊野詣での紀行」(「蝶夢和尚文集」収。以下「文集」と略称)にのみ追憶を綴る。

6、生年は今「師傳」によったが、蝶夢自身が記す年令に徴しても正しい。月日は「年譜便覧」によった。

7、京東山五条大谷口にあって遊行三十三世他阿上人の開基、豊国大明神の地に在るに因んで始め松園山豊国寺と号したが、近世豊を法に改めた(「雍州府志」)。一説に、江州浅井備前守長政息女淀君が再興したと言(「拾遺都名所図会」)。「道統系譜」は「幻阿上人は浅井家に縁故ある家に生給ひし因により豊臣秀頼公の御母堂淀殿施主にて再興ありし石山寺に奉灯せられ……」と述べ、ここでさらに頭註して、法因寺が淀殿の再興になることを指摘している。付会の説なることを怖れつつも、

出身不明の蝶夢ゆえ浅井家縁故説はまだ黙殺できない。

8、「裏富士の紀行」(「文集」収)に「……おのれを木端と呼しに思ひめぐらすれば廿といひし年の比ならむ……」とある。難僧時代からの称であろう。

9、京寺町通今出川上ルにあるが、かつては西之京芝薬師蓮台野に位置した(北田氏前掲書一二ページ)。開山生誉清玉は、織田信長生害の後本能寺に赴いて骨灰を聚め、手厚くこの寺に葬ったと言われ、(「雍州府

志) 今なお寺内に信長の墓碑を存している。

10、この間の事情は、北田氏前掲書一―二ページに詳しい。一見撞着するかに見える次の二資料間の解釈についても北田氏に従いたい。

……蝶夢と申名は十三歳の頃より師の寺の文庫に俳諧の枝葉集と申物御座候を見て其表紙にみつから睡花堂蝶夢と書申候ものはしまりにて候則致所持居申候其外は由来は無御座よし被仰可被下候。(天明元年三月二十日白露宛書簡)

我むかし家を出て東山の方丈に入て後駈鳥の比ならん書架に枝葉集といひける書の有けるを見て俳諧のかしきをおほへしより京極中川の院に住けるに師の僧を般亮といひ法兄に一松といふ人の有けるか常に其ころを語けるを聞いてみつから蝶夢と名を付ぬ。(「草根発句集」序)

11、北田氏は音長法師の俳名とされる。(前掲書一三ページ)

12、「故法師は當院八世の僧にして此寺に住事四十余年稟性柔和に口には非をいはず……」(「音長法師追悼和歌跋」)

13、「年譜便覧」が蝶夢を「當院九世の法嗣」とする誤りは、八世音長法師を継いだとの誤解によると思われる。

14、「諸九尼の生涯」(「湖白庵諸九尼全集」収)四三六ページ。

15、かかる不自然な解釈を下さねばならぬ理由は「己丑墨直し」序にあるが、この序に年月は記されていない。この序の執筆が五年以前と証明されぬ限り、問題は水解しないわけである。

16、「経木帳改」には「十二世 青督 松童和尚 文化十一年八月八日」と見える。

17、明和五年六月二五日付の「門のかをり」奥には「京極中川の庵なる半閑堂の竹窓にして」と記した。「松しま道の記」の冒頭にも見え、明和二年秋、東都より西上した既白を宿らしめたのも半閑堂である。蝶夢の

私室であろう。

18、「蝶夢雜考」(「大坂と蕉門」収)八九ページ以下。

19、完本未見。「戴恩謝」付載広告によれば四冊、丸山一彦氏執筆の「俳諧大辞典」によれば、東北・西南・洛・本文の四部より成る半紙本また大本の四冊という。「綿屋文庫連歌俳諧書目録」は宝暦五年の条に刊本二点を掲げ、西南・東北の部の半紙本二冊、洛の部の大本一冊を各一点とする。明治大学図書館の分類カードによると同館蔵本は宝暦五年の跋を持ち、該本の同年刊であることは疑いないが、東北の部の米花庵田社の序には「ことし六十五翁誹仙宋屋の風雅を賀して」とあつて宝暦二年の序なることを示しており、額原退蔵博士も(「蕪村」一〇五ページ)清水孝之博士も(「蕪村評伝」七四ページ)宝暦二年成立とされている。各部によつて板の大小を異にするのは刊年を別にするためかとも思われるが、今は推測の域を出ない。

20、高木蒼梧氏「俳諧人名辞典」三七九ページ以下によつた。次の宋屋句の詞書「ふたとせあまり」を満二年以上と解すれば、帰洛は延享四年となる。

21、この春季発句の六吟歌仙は同門内輪の寿会で巻かれたもので、來客七十九人の年賀の正宴は某年六月一日北野で催された。(同書洛之部)

22、北田氏前掲書二三ページによつたが、明治大学図書館本は、蝶夢句及び跋の掲載丁を欠いている。

23、「誹諧家譜」(宝暦元年刊)(後附京師點者門弟發句)には「富鈴房門人」として出るが、「誹諧家譜拾遺集」(明和七年刊)には風狀門として出ている。当時は既に風狀門であつたらしく、翌六年立机して記念集「冬木立」を出した。

24、北田氏前掲書四〇ページによつた。高木氏「俳諧人名辞典」四一四べ



一ジでは「夢の一葉」と呼んでいる。

25、「戴恩謝」付載広告に「近刻」とあるので刊行は翌八年か。

26、「俳悔」による。大谷篤藏先生「大伴大江丸」

(「俳句講座」3収) 参照。

27、延享四年に伊勢派の鼠通等が出した「俳諧笈塵集」に出句している。

28、寛保四年の「四時堂米史歳旦集」の巻軸は淡々の句である。

29、高木氏「蝶夢と落柿舎」二三ページに、「杖の土」所載として次の句を掲げる。「風」は「鳳」の誤りか。

師夏の行脚に古曾部の法師のむかしを思ひ

能因と咄や合ん秋の風 風声平 蝶夢

30、高木氏「俳諧人名辞典」三四五ページには二柳門とする。二柳の指導も受けたであろうが、「白鳥集」跋によれば東恕門らしい。

31、關原退藏博士「奥の細道」の原本」(「芭蕉研究」3収)・「芭蕉所持素龍真蹟本奥の細道」附録参照。

32、大河寥寥氏執筆「俳諧大辞典」二「柳」の項、西山氏「不二庵二柳」(「大阪と蕉門」収) 参照。

33、北田氏前掲書四七ページ、西山氏前掲稿七ページ。

34、前掲書二八ページ。

35、京都大学文学部關原文庫蔵。「關原文庫目録」では「宝曆頃刊」とするが、二柳が春に「東湖」(近江八幡を指す)に滞在したのは宝曆十一・十二の兩年であること、十二年の「墨直し」は別に紹介済みであること、の二理由から宝曆十一年刊と決定できる。

36、西山氏前掲稿八ページ。「壬午紀行」によると言う。

37、「落葉籠」所載の二柳留別句詞書による。

38、西山氏前掲稿九ページ。大河氏「加能俳諧史」によると言う。

39、西山氏によれば、讃州丸亀に在った二柳に「この頃京の蝶夢から凡圭の死を報じて来た」(前掲稿一三ページ)と言う。氏の記事は二柳の「壬午(宝曆十二年)紀行」によったもので「この頃」は宝曆十三年のようであるが、凡圭の死は宝曆十年十二月二十三日(「俳諧大辞典」)であり、その時間的ずれは気にかかる。それにしても、この資料によって

凡圭が蝶夢・二柳共通の友人であったことは証される。また、二柳の後援で成った「白鳥集」に、「京師」として宋是(凡圭)と蝶夢が並んで出句することもそれを裏付けよう。

40、石川銀榮子氏「越前俳諧提要」には野坡門、更の「ゆめのあと」序には希因門と言う。両者に師事したのであろう。

41、西山氏前掲稿九ページによれば、「不二庵終焉記」に「さ、なみや近江の国にては白鳥の撰あり」とある由である。

42、西山氏前掲稿一ページ以下「壬午紀行」によると言う。

43、従来没年未詳とされたが、蝶夢の次の句の詞書

既白乙兒蘿来つ、いて古人と成し七月六道の珍 寺にて

誰も来よかれもとかなし迎鐘 (「草根発句集」)

によって、明和八年または九年(安永元年)と推定される。なぜなら蘿来は明和八年七月十六日、乙兒は同九年四月五日の没であって、この句の成った七月は九年の盃迎えでなければならず、既白の没日はこれ以前一年内にあるわけである。

44、清水博士「伊勢の古調運動 樽良一既白一更」(「国語と国文学」

三七年四月号)では、宝曆十一年末逸漁宛樽良書簡を引用されて、この「中四国旅行のあと、秋冬の頃から熊野本宮湯に既白が滞在し」(一二六ページ以下)たと言われる。

45、「俳諧諷鳥」に「橋ヒナチ半化」の名が見え、既に宝曆七年に更が

寒瓜を訪問したらしいから、その紹介によるのであろう。

46、西山氏前掲稿六ページによれば、二柳は寛延三年七月師希因没するや幾程もなく漂泊の旅に出たと言う。

47、今、西山氏前掲稿一〇ページ所引によった。

48、西山氏前掲稿一二ページ。

49、綾足(涼俗)編「片歌道のはじめ」による。

50、孤本と思われる天理図書館本は、序に当たる一丁目を欠く。

51、刊年の明記なきため、「綿屋文庫目録」では寛延四年奥の自筆稿本に並記する。宝曆十三年刊行説は既に荻野清氏が「俳諧大辞典」「麦水」の項で立てられたが、辞典という性格もあって根拠を明示してはおられない。よって次に略述しよう。蝶夢跋によれば麦水は本書刊行後京で越年し、翌春東下せねばならない。宝曆末年麦水東下が明らかなる年は、大河氏「堀麦水」(「俳句講座」3収)三三二ページによれば宝曆十四(明和元)年である。また素水の題言に「宝曆某のとし金城の四楽庵を生まるものに譲りて世を小松のほとりにかくる其日水無月朔也けり」と言う「宝曆某年」を、蔵月明氏(「俳諧大辞典」「鶉だち」の項で中村俊定氏が紹介)や大河氏(前掲稿三三二ページ以下)に従って宝曆十一年と仮定しよう。そして題言を素直に読んで行けば、「其冬一株のあふちをたのみかた斗の庵をむす」んだのは同十一年、「其あけの春もはや杖笠に心うこ」いたのは翌十二年、「ことしは湖東東京にくれなむ又その明の春も猶頭陀僧のつゝくるへくはあちに飛こゝに隠れんとするの、十三・十四年の交と考えられ、題言執筆すなわち刊行の年は宝曆十三年に定まるのである。

なお付記すれば、この蝶夢跋は「文集」収録時かなりの改竄を受け、例えば「ことしはみやこの雪に水はなをたれこん春は東の花に誕をなか

さん事のうらやまし」の部分は「ことし都の花よたれを流し来る秋は更科の月に目をさまさん事のうらやまし」となっている。雅文化意識の現われと思えるが、「文集」を資料として用いる際には、一応の注意を要するようである。

52、来坂中の鳥酔に接したらしく、宝曆六年刊「芭蕉翁墓碑」、同八年刊

「冬扇一路」等に出句する。

53、但州生野には、宝曆九年二柳が立ち寄っている。

54、今、大河氏前掲稿三三二ページ所引による。琵琶舟は長浜住であるが敦賀の人、「白鳥集」にも出句し、その跋によれば東怨門である。